

開催地名：青森県三沢市	
開催日時	令和3年1月26日（火） 9：30 ～ 11：00
開催場所	三沢市消防本部
語り部	山崎 義勝 （岩手県釜石市）
参加者	三沢市消防職員等 53名
開催経緯	<p>当市では、日本海溝・千島海溝地震による大規模被害が予想されており、消防職員及び消防団員における発災直後の災害対応が課題となっている。そこで今回、東日本大震災の語り部より、緊急消防援助隊を受援する際の具体的な対処方法や、若年層職員等に対する災害伝承についてお話を伺うこととする。</p>
内容	<p>（1）はじめに</p> <p>岩手県釜石市は製鉄業で発展し、ラグビーの強豪、新日鐵住金釜石を擁する「鉄と魚とラグビー」の町である。最盛期の人口は9万人を超えたが、製鉄業の衰退と東日本大震災の影響で、現在の人口は約32,000人となっている。</p> <p>東日本大震災では、リアス式海岸に押し寄せた津波によって、888人の尊い命が奪われ、関連死を含めると死者数は約1,000人に達し、152人が行方不明となった。家屋倒壊は3,656棟を数えた。私は震災当時、釜石大槌地区消防本部消防長だった。当日の被災状況や活動状況についてお話しさせていただく。</p> <p>（2）大津波警報発令</p> <p>釜石市をはじめとする三陸沿岸地域では、江戸時代以降の大小の津波の襲来度数をみると6、7年に1度の割合で、また、古くからの記録によると40年～50年に1度の割合で津波が発生しており、政府の地震調査委員会によるとこの30年以内に宮城沖で地震が発生する確率は99パーセントと非常に高くなっており、それにとまなう津波が発生する確率も当然高いものと考えられていた。釜石市には、ギネスブックにも登録された世界最大水深(63m)の湾口防波堤が31年の歳月をかけて2009年3月に完成していた。明治三陸地震津波規模の大津波に対して、湾内の防潮堤の天端高(おおむね4m)より低い水位に減水させることで市街地への浸水被害の拡大を防ぐ機能が期待された。</p> <p>しかしながら、東日本大震災では、設計外力を超える大津波の威力により、防波堤は大きく損壊し、津波は湾内の防潮堤を越え、ハザードマップで想定していた浸水域を大きく越えて被害が広がった。地震発生約30分後に襲われたこの津波により、一瞬にして約1,000人の命が奪われた。防波堤は一定の減災効果を発揮したことが認められたが、想定以上の津波だったことが伺える。</p> <p>被災状況は、地域によって異なった。孤立した漁村集落もあり、無線機による安否確認を継続して行った。翌日、早朝から水は引きはじめ、緊急消防援助隊の</p>

受け入れ準備が開始され、自衛隊による被害状況調査活動と救出活動、物資配給活動が開始されるとともに、海上保安庁による洋上捜索も大規模に展開された。3日目の早朝に緊急消防援助隊が到着し、救出や救急搬送が行われたが、実質的には遺体捜索活動が主となった。

### (3) 被災状況と安全確保

釜石市の消防職員 108 人のうち、2人が殉職した。家族が犠牲となった職員は 19 人、被災家屋数は 41 棟に及んだ。釜石市消防団についても死亡者が 14 人（殉職者 8 人）発生した。私は殉職者の遺体が安置されている体育館で面会することができたが、ただただ涙があふれるばかりで、何一つ言葉が出なかった。あの時の記憶は、死ぬまで忘れないと思う。殉職者を出してはならない。

東日本大震災の際、地震発生後津波が押し寄せるまで 30 分程度の時間があつたが、その間にできることは、基本的には高台に避難することのみであると考えていただきたい。消防職員であっても、限られた時間でできることは限られる。緊急事態発生時には、上からの命令ではなく、自分の判断で適切な行動ができるよう、日頃からイメージしておくことは極めて重要である。消防職員であっても自分の命を守ることを最優先していただきたい。



開催地より

豊富な映像を使って、東日本大震災の緊迫した状況をわかりやすくお話いただいた。大規模災害時における消防職員の心の葛藤について考えさせられた。災害状況（現状）に応じた災害対応計画の樹立を目指し、今日の講演を今後の活動に役立てていきたい。